

## 刊行に寄せて

東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構（以下 CoREF）は、大小さまざまな市町教育委員会及び学校等と「新しい学びプロジェクト」、埼玉県教育委員会と「未来を拓く『学び』推進事業」という協調学習を引き起こす授業づくりのための研究連携事業を行っている。平成 22 年度から始まったこれらの研究連携は今年度で 5 年目となった。また、連携の成果を活かした、自治体の研修事業における協調学習を核とした研修プログラムの開発、実施も今年度で 3 年目となる。

いずれの事業でも私たちは現場の先生方と連携して、「人はいかに学ぶものか」について今研究分野でわかってきていることを基盤に、教室で行われている授業の質を上げ、子どもたちが自分たちで考え、理解し、次に学びたいことを見つけ出しつづける新しい学びのゴールを追求してきた。また、一連の事業を通じて私たちは、私たち研究者、教員、そして様々な分野の社会人専門家のコミュニティが緩やかに重なりながら、こうした新しい学びのゴールに向けて、それぞれの専門性を活かし、教室の事実に基づきながら継続的に授業の質を上げるためのネットワークを構築することを目指している。

本報告書の作成並びにその基本となった事業においては、「新しい学びプロジェクト研究協議会」参加の 12 道県 19 団体、埼玉県教育委員会、千葉県柏市教育委員会をはじめとする関係教育委員会、学校のみならず、日本産学フォーラム、日本技術士会統括本部登録団体「わくわく理科教育の会」をはじめとする社会人専門家のみならず多大なご支援、ご協力をいただいた。この場を借りて感謝を表したい。

本報告書は、2 部構成全 8 章から構成される。第 1 部では、平成 26 年度の私たちの研究連携の活動の報告を行っている。第 2 部では、この 5 年間の研究連携から私たちやともに研究してくださっている実践者の先生方に見えてきた、知識構成型ジグソー法を用いて協調学習を引き起こす授業づくりに関する知見をハンドブックの形でまとめている。

第 1 部「平成 26 年度の活動報告」の概要は以下の通りである。

第 1 章では、CoREF と自治体及び産業界との研究連携・協力事業の基本的な枠組みと今年度の各事業における取組の概要を紹介している。自治体、学校等との研究連携として、第 2 節に「新しい学びプロジェクト」、第 3 節に「未来を拓く『学び』推進事業」、自治体の研修事業のプログラム開発、実施への協力事業として、第 4 節「21 世紀型スキル育成研修会」、第 5 節「埼玉県 高等学校初任者研修」、第 6 節「柏市 小中学校 5 年経験者研修」、を扱った。また、第 7 節では、「連携の広がり」と題して、上記外の教育委員会、学校等との研究連携の広がりや社会人・産業界の専門知を授業改善に役立てる活動との連携、高大のコンテンツ・ギャップ解消を目指す東京大学の新型高大連携事業などについて報告し、私たちの目指すネットワーク・オブ・ネットワークスの形成の今後の可能性を示した。

第 2 章「『本郷学習科学セミナー』の取組」では、こうしたネットワーク・オブ・ネッ

トワークス形成の一環として、連携事業の物理的な距離や校種・教科を超えて先生方が学びあえる場として今年度から組織した「本郷学習科学セミナー」の取組について報告した。第1節で取組のねらいと概要を説明し、第2節では今年度既に実施した10回のセミナーのプログラムと手ごたえを、第3節ではこうしたセミナーに参加された先生方のお声を中心に今年度の成果を振り返り、次年度に向けての課題を挙げた。

第3章「新しい学びの『評価』のために」では、昨年度に引継ぎ、協調型の授業で児童生徒に起こっている学びを評価するための方法についての私たちの提案を報告している。第1節では、私たちが研究を進めている授業の前後と対話記録に基づく評価を中心に評価の方法を理論的に整理し、第2節では、実際の対話記録を私たちがどのように分析するか、そこから児童生徒の学びのどのような姿が見えてくるかを示した。第3節では、こうした対話記録に基づく評価を現場に入れていったときにどのようなことが起こりそうか、本郷学習科学セミナーに参加された先生方の手ごたえから今後の可能性を示した。

第2部「協調学習 授業デザインハンドブック」の概要は以下の通りである。

第1章「授業づくり導入編」では、第1節に「背景となる考え方」として、私たちが研修の導入で使用しているスライド解説を収録し、第2節では「授業づくりのポイント」として、目指す学習の原理に基づく、あるいは5年間の研究連携から経験的に見えてきた「知識構成型ジグソー法」を用いて協調学習を引き起こす授業をデザインする際のポイントをQ&A形式で整理した。第3節「新しい学びのゴールと評価」は、目指す学びのゴールがこう変わって、だから評価のあり方も捉え直しが必要であるという基礎理論の話である。

第2章「CoREFによる授業実践の分析」は、小中高さまざまな教科を題材に、知識構成型ジグソー法を用いた授業でどのような学習が起こっているのか、またそうした学習の成果を私たちはどのように見取り評価するのか、の一例を示した。

第3章「教科部会での研究から見えてきたこと」では、今年度「新しい学びプロジェクト」及び「未来を拓く『学び』推進事業」研究推進（委）員等の先生方がまとめてくださった各教科部会の研究成果と課題のまとめ、現時点で見えてきていることを収録した。

第4章「実践者の体験談」は、協調学習の授業づくりに継続的に取り組んでくださっている先生方がこの授業をどのように捉え、そこから何を学ばれているのかの体験談である。

第5章「データ編」は、5年間の研究連携の成果を集めたデータ集である。データは実際にご活用いただける形で付属のDVDに収録されている。DVDには、「開発教材」として、小中学校227、高等学校484の教材について、授業案や教材、実践者の振り返りコメント、児童生徒の記述例（一部教材のみ）が収められている。また、「実践動画」として、これらの教材の一部を用いた授業風景の動画も収録している。あわせて、「参考資料」として私たちが研修等で行っているスライドを用いたレクチャーや過去の年次報告書の電子データ、「新しい学びプロジェクト」の先生方による協調学習Q&Aも収録している。

東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構

副機構長 三宅なほみ